

コンコンとドアを

ノックして欲しいと願ひ

仲間と体験談をつづりました



人間関係

ゆき

私は父との関係が良くなく楽しい記憶はなかったので家庭を持ったら子供たちにいっぱい愛情を注ぎ明るい家族にしようと思っていました。息子たちが小さい時には、本当に可愛がったし幸せだった。

依存症の息子は年少から軟式少年野球をし、低学年・高学年のキャプテンを務めていた。野球をしている時の息子は本当に活き活きしていた。でも、走るということを苦手としていたことが気になっていた。中学生になり硬式野球に変わり、息子は硬式野球について行けなくなり休みがちになった。私が見ているのも楽しんでる様子は感じられず辛そうであった。その時、私は励ます事ではなく「悔しくないのか！頑張れよ！」と追い立てていた。結果、退部した。中二の時から登校拒否になり、薬物使用が始まった。

最初の薬物は、処方薬・ガスだった。この時点で何とか止めさせなければと迷走していた。あの薬に行きつくまでに、必死で相談窓口、勉強会、家族会へと通った。不安や、絶望の中で過ごしていたあの頃には、本当に戻りたくない。しかし、息子はいろんな薬物に手を出しクローゼットで大麻を栽培する様にもなり、覚せい剤にも手を伸ばしていった。薬物の使用がエスカレートするに伴い、息子の目つきや行動も豹変していった。ゴミ屋敷同然の部屋、飛んでしまった視線、動物のような食べ方、盗聴器が仕掛けてあると探し回り、誰かに付け回されていると言う幻聴幻覚。そんな状態でどっちが強いかと喧嘩をはじめ、顔は血で染

まりドブにはまり、ドロドロになってズボンがズレ、お尻が丸出し、ヘラヘラと笑っている息子を見て到底言葉には表現できない気持ちになった。もう終わってしまったと一気に全身の力が抜け落ちる瞬間だった。それからも薬物が引き起こす問題はどんどん続いていった。息子が豹変して行く事に伴い、私たち夫婦も、そして兄弟も崩れていき、可愛かった息子への感情は不安や恐れ、そして憎しみ、殺意に変わって行った。薬物を憎み、それを息子に与えた人を恨んだが、息子そのものを恨むようになった。アイツさえいなければ楽になると「頼むから死んでくれ」と願い現実から逃げたかった。

息子と一緒にリビングにいても、私は息子の存在そのものを無視し続けた。

そして私の体からは「早くどこかに行ってしまう」のオーラと言うか悪意の塊を思いつきり出していった。自分の怒りや憎しみの感情が頂点に達すれば息子に文句を言って、そこから取っ組み合いの喧嘩だ。いつも決まり切って息子は「俺をゴミを見るみたいな目で見るな」と言っていた。

そう、私は自分の息子をそんな目で見ていた。そして「お前の大事なものを壊してやる！」と叫び、テレビを揺らしたりバットを持ち出して「車を潰してやる！」と言いながら外に出て車をどついていった。車もフロントガラスを割るのではなくタイヤを叩いていたようだ、車には傷一つない。包丁を持ち出して私に突き付けて「これで俺を殺してくれ！」と涙ながらに訴えてきたこともあった。

当時は、息子を憎んでいたし、私自身が病気だった、鬱病だ。だからと言うわけではないが、息子の気持ちを理解することは出来なかった。止めたくても止められない「病気」だと

今ではわかるが、当時は、息子を責める気持ちしかなかった。私は自助グループに繋がり、薬物依存とは何か、家族はどうすればよいか、自分はどうすれば良いか、と言う事を学んだ。今思えば、自助グループに繋がるまで私は孤独だった。当時も周りには人はいた、しかし人との繋がりを作ることをしなかった。薬物依存で苦しんでいる渦中では、息子も孤独だった。孤独には暗闇しかない。自助グループには同じ経験をしている人達がいて、自分の今までの事を理解してくれて共感してもらえる。辛かったのは私だけではない。絶望と不安を乗り越えて、そこにいる人達は笑っている。私は繋がることで、優しさを受け取っている。今年三十歳になった息子は、同じ境遇の仲間と繋がり、自立して生活しています。そして、自分がやりたいと思っている仕事の目標をもち、それに向かって自分の足で進んでいます。完全に薬物を断ったかは分かりません。それは息子次第だ、ただ信じて見守るだけ。これは、私たち夫婦が息子を変えたものではありません。私たちは、自助グループで同じ仲間を支えて貰いながら学び、そして行動に移してきました。

私が鬱になったのは、人間関係。息子が孤独になったのも、人間関係。そして、私の鬱が治ったのも投薬治療でなく、人間関係。息子が回復し続け、自分の足で人生を歩んでいるのも親以外の人間関係があるから。この人間関係を経験したことで「愛された」父という記憶もなく、「親みたいないな人間にはなりたくない」と思っていたけれど、今では「愛されていたのだ」と気付くことができた。

もっと早く、繋がること出来ればと思う事もありましたが、それも今は受け入れることが出来ます。まだ繋がっていない方、繋がって間もない方に遅いという事は無いと伝えたいです。

用語の説明

ハイヤーパワー

自分自身を超えた、自分よりも偉大だと認められる「力」。
薬物依存に無力であるからこそ、自分を超えた大きな力に自分をゆだねている。
その力についてどう解釈するかはまったく各人に自由に任されている。

スポンサー／スポンサーシップ

回復の十二ステッププログラムを実践するにあたり、メンバーはより経験のあるメンバーに相談し、助言や提案を示してもらう。その助言者をスポンサー、その関わりをスポンサーシップと呼んでいる。

回復の十二ステッププログラム

回復のプログラムとして提案されている十二のステップは、スピリチュアル（霊的）な特徴を持つ生きかたの原理。

フェローシップ

本来は仲間の集合体を指すが、ミーティングを離れた仲間同士の交流の意味で使われることが多い。